



第五十一回 のっぺらぼう

始まるけれど終わらない落語です。

吉兵衛さんが赤坂の弁慶橋にさしかかった頃には夜もだいぶ更けておりました。昔はあの辺りは寂しく、真っ暗だったそうで。

か すかに見える橋の中ほど、女性が欄干から身を乗り出している。身投げだ！ 助けなきゃ。吉兵衛さんはそ

うっと忍び寄り、帯を攔^{つか}んで引きずり倒す。

「死んではいけません。でも死のうてんだ。よかったら事情を話してみませんか」

しかし女性は泣くばかり。やがて泣き声がピタッとやむと、言いました。

「こんな顔の私でも話を聞いてもらえますか」

振り仰いだ女性の顔を見て驚いた。目も鼻も口も何にもない。

出た、のっぺらぼうだ！ 吉兵衛さんは闇雲に逃げ出した。こ

けつまろびつ四谷見附へ出た。と、そこに夜鳴き蕎麦屋^{そば}の提^{ちよ}灯^{あん}の明かり。地獄に仏と飛び込んだ。

「水を、水を一杯」

「どうしました。何かありましたか」

「で、出たんだよ、のっぺらぼうが弁慶橋に」

「お客さん、のっぺらぼうなんかいませんよ。あれはカワウソの仕業です。狐^{きつね}や狸^{たぬき}は人とそっくりに化けますが、カワウソは顔だけ化けられず、それでのっぺらぼうになるんです。だからカワウソは本当は顔^{かほ}ウソ^{うそ}なんです」

「オレは本当にのっぺらぼうを見たんだよ」

「見たんですか。本当に？　するとあなたのご覧になったのっぺらぼうというのはもしかするとひょっとして、こんな顔じゃあ」
振り仰いだ蕎麦屋のおやじの顔を見て驚いた。目も鼻も口も何にもないのっぺらぼう。

ギァと吉兵衛さんは家へと逃げ出した。

「おっかあ、開けてくれ、開けてくれ！」

「なんです、ドンドン叩いて。どうしたんです。落ち着いて話してよ」

「出くわしたんだ、のっぺらぼうに」

「おまえさんは気が小さいからなにかの見間違いでしょ」

「いや本当にこの目で見たんだ。最初が弁慶橋で女の人だ。二度目が逃げ込んだ夜鳴き蕎麦屋のおやじだ。このおやじまでのっぺらぼうだったんだ。いやよく家へ帰れたもんだ」

「あんた本当にのっぺらぼうを二度も見たの？」

「ああ本当だよ」

「あんたが見たのっぺらぼうってのは、もしかしてひょっとするとこんな顔じゃあ」

振

り仰いだ女房の顔を見て驚いた。目も鼻も口もないのっぺらぼう。吉兵衛さんは逃げ出そうと思ったが、すでに家へ帰っちゃってる。仕方なく気を失って倒れた。

「どうしたの、起きてよ、ずいぶんうなされて。悪い夢でも見

たの？」

「え、夢？　ああ夢だ。夢でよかった」

吉兵衛さんは女房に二人ののっぺらぼうの話をして聞かせる。
「で、ようやく家に帰ってきたら、おまえまでがのっぺらぼうだったんだ。怖い夢だろ」

「女の人や蕎麦屋さんは赤の他人だからのっぺらぼうでもいいけど、長年連れ添った私までのっぺらぼうにすることはないじゃないか」

「夢だからしょうがないよ」

「本当にそんな夢を見たの？」

「見たよ」

「そう。おまえさんの夢に出てきたのっぺらぼうってのは、もしかしてひょっとするとこんな顔じゃあ」

女

房の顔を見て驚いた。目も鼻も口もないのっぺらぼう。ギァと吉兵衛さんは逃げ出そうとするが、すでに家に帰っちゃってる。仕方なく気を失って倒れた。

「どうしたの、起きてよ、ずいぶんうなされて。悪い夢でも見たの？」

「ああ夢でよかった。怖い夢を見たよ」

あとは延々とこれを繰り返します。

ね、「始まるけど終わらない」でしょ。